

時代を記録する岩波写真文庫 『利根川 1955』

小学生の頃、図書室で保育社カラー文庫や岩波写真文庫で城・洋館・地方都市・産業の風景を眺めていた。まだ見ぬ風景や仕事の実態は、子供心に様々な興味を掻き立ててくれた。
(菊地実)

※なを、本書はページがふってないので、掲載写真解説中心となります

映像の時代

今やレストランに行っても街角でもスマホをかざす人でいっぱい。それは観光客や老若男女の区別はない。昔の大宅壮一風に言うなら、所構わず<一億総カメラマン>。十九世紀末コダックがカメラ写真を大衆化したと言われるが、本当の映像化社会は現在であろう。それはSNSを含めオーウェルが描いたディストピア『1984』とは違った形でソフトな監視社会を作りつつある。ところでこの膨大な写真(映像記録)は今後どのように活用されて行くのだろうか？

前置きが長くなったが、先に岩波写真文庫を紹介しておく<図表1>。刊行は昭和二十五年から昭和三十三年。戦争跡も残り、高度経済成長以前の姿がここに写されている。編集長・名取洋之助は木村伊兵衛と並ぶ日本報道写真の双璧。戦時中は対外PR雑誌『NIPON』で活躍。この人脈が戦後の写真・広告・デザ

<図表1> 岩波写真文庫

- 発行元: 岩波書店
- 写真: 岩波映画製作所 他
- 編集長: 名取洋之助
- 発行時期: 昭和25(1950)年~33(1958)年
- 発行点数: 286点
- サイズ等: B6判・64頁、モノクロ写真(復刻判はA5判)
- 価格: 各100円
- シリーズ(内容): 新風土記・戦争の記録・日本人の暮らしの記録・都市の記録・古都案内・芸能の記録・住まいと生活の記録、産業、動物、科学



<岩波写真文庫>

イン・記録映画の一大潮流を作った。写真を担当した岩波映画製作所も記録・短編映画の雄で数多くの名作をものにした。写真文庫『鎌倉1950』は長野重一さんの写真で、<静と動>の妙は小津映画を連想させる。また『雪の結晶』は当時岩波映画に所属していた中谷宇吉郎博士の雪研究を映像化した科学映画の写真版。

水準の高い空撮技術

今回取り上げる本は復刻版岩波写真文庫『利根川—空からみた—1955』。復刻ワイド版は1980年から従来のB6判からA5判に拡大された。『利根川』は旧版ではナンバー136だったが、復刻版では108となっている。

今は衛星写真やドローン活用で空撮技術は飛躍的に

発展しているが、1950年代でこれだけの空撮をするのは産業映画に手慣れた岩波映画ならではと高く評価される。

空撮技術は音響工学ハイファイが潜水艦探知技術発展の影響を大きく受けたように、第二次世界大戦中の写真偵察に寄るところが大きい*1。空撮はいわば鳥の目で対象をマクロ巨視的に捉え、世界は抽象化されやすい。一方前述した写真文庫『鎌倉』に代表される報道写真は、地に這った虫の目で世相を切り取る手法で、具体的・現実的色彩が強い。両者は対称的技法である。

川は昔の記録を懐かしむ

山ならば噴火や土砂崩れでも数百年の人間の時間では大きく変わらない。セメント用に大きく山腹を削られた秩父・武甲山でも山そのものは揺るがない、ところが川は数百年で人工的に大きく変貌を遂げる。その代表的な川が、<東遷>で大きく変容した利根川である。坂東太郎と呼ばれた利根川は「日本第一の大河である。日本第一の平野を潤している・・・世界にも類のない大改修工事が、徳川初期に行われ、昔の流路を全く変えてしまった・・・ひとたび怒れば、何十万町歩を泥海と化し、数万軒という家を流し去る」(序文)。この文章を読んでも表現や内容がいかにも昭和二十年代末という感が強い。利根川東遷に関しては最近の詳細な研究で少しずつ改修が行われ、それは明治になっても続いた。また大水害は本書刊行の七年前、昭和二十二年九月キャサリン台風による栗橋近辺の堤防決壊

で埼玉東部及び東京が大被害を受けたことを表現している*2。川は氾濫すると昔の記憶を呼び覚ます。

昭和二十年代の田園風景

水海道町(関宿町)と境町の間はなんと舟橋がかかり、自転車と人が渡っている。ここは昔は鬼怒川の支流で将門公が活躍していた土地。鳥川と合流する埼玉・深谷では川の中に十数頭の乳牛がノンビリと歩いている。

上州(群馬)に入ると、利根川は上越の山々からの水を集める。前橋・高崎あたりは朔太郎がしばしば歌った広瀬川。渋川から西に向かう吾妻川(この界限に浅間山や草津温泉がある)。

一方、渋川から北に向かうと、沼田で三国峠・谷川岳さらに尾瀬沼からの片品川などに至る。片品川は戦国時代、謙信公の軍勢がさまよった道でもある。広々とした下流や中流と異なり、二千メートル級の山々の間で大利根は山岳地帯を湾曲し谷を作る。近代まで利根源流は様々に探訪されたが、上州・越後・岩代三国にまたがる大刀嶺岳(おとおねだけ)にあるとしている。

電力、ダム、堤防そして物流の大変貌。さらに高度成長前の利根川の姿は興味深いものがある。

*1: 第二次世界大戦後、進駐軍は日本の偵察機で使用していた千代田光機(のちのミノルタカメラ)のレンズ性能に驚いた。

*2: キャサリン台風は死者千人以上で、五千以上の全壊家屋も出た。床上浸水は十万近くと言われている。ただし決壊は利根川だけでなく、鬼怒川・小貝川など関東の川全体に及んだ。

■書誌/ 岩波書店、1955年1月発行(B6判)。復刻版1990年3月発行(A6判)、

■参考文献/ 赤松宗旦『利根川図志』<柳田國男校訂、岩波文庫、1938年>

赤松宗旦の『利根川図志』は、利根川中流・下流流域の繁栄を活写した幕末の名著。怪しげな軍記物や伝説奇談や木版画が楽しめる。物流の大動脈としての利根川がよく理解でき、柳田民俗学にも大きな影響を与えている。

・小出博『利根川と淀川』<中公新書、1975年>

小出博『利根川と淀川』はサブタイトルを「東日本・西日本の歴史的展開」と題し、関東・関西の代表的河川開発史を試みている。